

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文審査報告書

論文題目

フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究

Study on the Architectural Detail Design of the Wooden Remains
of the Nguyen Dynasty in Hue

申請者

六反田 千恵

Chie ROKUTANDA

建築学専攻 建築史研究

2014年2月

本論文は、ベトナム中部の都市・フエに現存する阮朝建築遺構群の細部意匠と建築形式に関し、はじめて体系的に考察した研究である。阮朝建築遺構群を中心とするフエの歴史的建造物群は 1993 年に東アジアの封建王都のまとまった質と量をもつ遺構群として、ユネスコ世界遺産に登録されて以来、広くその存在が知られるようになってきたが、建築史研究はまだその端緒についたばかりである。阮朝建築の歴史的変遷を辿る上で大きな障害となっているのは、各遺構の年代判定の難しさである。ベトナムは、19 世紀後半～20 世紀にかけての被植民地支配、相次ぐ戦乱、史料記録の不足などのために沿革不明な遺構が多い。さらに木造を中心とする建築遺構群は部分的な改変も多く見られ、それぞれの当初性や改変時期を推定する直接的な根拠がなく、歴史的考察が難しい状況にある。阮朝建築に関する既往研究は、史料研究と遺構の配置計画・設計方法から各部材構成、彫刻意匠などその方法は多岐にわたるが、本来それらの研究の基礎となるべき各遺構の建築年代の確固とした根拠は示されていない。本論文はこうした状況を打開し、各遺構の細部意匠の変遷過程を基本的な手がかりとして建築年代の評価方法を示すものである。以下に審査の要点を述べる。

序論

序論において上記のような研究目的と研究方法について述べ、フエ阮朝建築遺構群の特色について概述している。特に第 3 節「対象遺構の概要」は、阮朝建築遺構の現状と史料記述や既往研究、ヒアリングなどから、各遺構の既知の情報を収集整理しており、これまでに個別分散的であった遺構群の建築年代に関する情報を網羅的にまとめたもので基礎的資料として評価できる。

既往研究と史料について要点をまとめ、第 6 節「史料に見る阮朝建築遺構群の造営過程」は、『大南寔録』の膨大な記述から阮朝造営史を 12 段階と史料記述以後に分けたもので、造営史に関し、新しい独自の視点から理解を助けている。

本論 第 1 章 建築形式

これまでの史料研究は造営関連記述をそのまま抽出整理したものがほとんどで、建築形式に関する記述に着眼したものはない。三大史料『大南寔録』『欽定大南會典事例（續編を含む）』『大南一統志』の通読から建築形式を決定する 4 要素「連棟、重簷、重梁、重層」を抽出した著者の分析は、阮朝建築の特質を捉えた指摘として重要な成果である。「参考資料：漢喃史料に見る建築形式記述一覧」は、三大史料に見られる建築形式に関わる記述を網羅し、建築物毎に整理一覧化しており資料的価値が高い。

第 2 章 連棟

建築形式を決定する要素の 1 つである連棟形式は、阮朝建築遺構の主要建築物の際立った特色でもある。既往研究においても、連棟式建築あるいは連

棟型建築とする記述はあったが、連棟形式を定義したものではなく、史料記述と現存遺構の詳細な比較考察から著者は連棟形式を承霤と重簷によって前殿と正殿を連結する形式であり、阮朝全期に渡って維持され、変化しない形式であることを明らかにしている。これは今後の阮朝建築史研究の前提となる定義と評価することができる。

第3章 重梁

本章が本論文の核心を為す部分である。重梁はもともと格式の高い建築形式を決定する要素の1つであり、阮朝連棟建築の内観意匠の要でもあること、その部材構成と彫刻意匠は多様性に富み、他地域に見られない特色が認められ、重梁自体が各遺構の建築年代評価の大きな要素であることを著者は論述している。即ち、既往の細部意匠研究は各遺構の細部を積み上げる帰納的な方法をとっていたため、細部の分類から建築年代に結びつけることはできなかったのに対し、本章の分析は建築形式→部材構成→彫刻絵様構成→彫刻絵様要素→彫刻作法と、より大きな枠組みからの演繹的な考察と、その考察によってはじめて推定可能となった、フエにおける阮朝建築の重梁の大まかな変遷過程の中に、各遺構状況に即した緻密で帰納的な分析方法を、組み合わせることで、はじめて各遺構（重梁部）の建築年代の評価と細部意匠の特質を結びつけて考察することに成功しており、今後の編年研究の礎となる大きな成果であると評価することができる。特に、彫刻作法から彫刻意匠の年代的特色を抽出する著者の評価方法は、彫刻をもつ他の部位と遺構の年代判定にも適用できる汎用性を方法的に可能にしたことを著者の貢献として特筆しておきたい。

著者が本章の考察で用いた阮朝現存遺構に見られる重梁（重梁に準じる構成をもった遺構を含む）を網羅した図版・写真・細部意匠一覧の資料的価値が高いことも付記しておく。

第4章 各部

本章で著者は、著者は阮朝建築の外観意匠の要である中央棟飾り、彫刻の年代的特色を示すケオ木鼻、連棟形式をつくる阮朝建築独特の承霤、装飾性の高い付底部架構である承榮についてそれぞれの史料記述と遺構現状を網羅的にまとめており、これらにも阮朝建築遺構に関する基礎的資料総覧としての価値が認められる。それぞれの節で、6種の中央棟飾りは宮区と建築物の格式によって定められること、最外周部の単体ケオと連結型ケオに絵様彫刻が施されること、承霤は少なくとも明命帝後期にはその構成が形成されていたが現存遺構の承霤部には多くの改変がみられること、承榮形式の付底は多くが後補で、建築本体と同時期につくられたのは表徳殿が最初であることを示している。とくにケオ木鼻の形状と彫刻意匠が重梁彫刻に準じた変遷を辿ることを、拓本による詳細な調査から論じている部分は、3章で導いた年代的特色の検証としても有意義である。

第5章 遺構評価

重梁彫刻の年代的特色を適用し、具体的な遺構の建築年代評価を試みている。とりわけ、明成殿主要部材が嘉隆帝中後期のものであること、肇祖廟主要部材は西側が嘉隆帝期、東側が紹治帝期・嗣徳帝初期、承霽部は維新帝期以降の特色を持つことを著者は指摘しているが、著者のこの考察は、彫刻の年代的特色による年代判定が汎用性をもった方法であることの例示でもあることに意義が認められる。明成殿、肇祖廟とも阮朝建築史上重要視されてきた遺構であるが、一方で既往研究ではその沿革に疑問のあった遺構であり、本章は本研究の方法が具体的な遺構の解明に資したことを示すものとして評価できる。

結論

各章の分析考察から更新された各遺構の建築年代情報を研究成果としてまとめて記述している。ここに記述された 18 棟の遺構は、現存遺構 63 棟の 1 / 3 弱であるが、各宮区の主殿建築を網羅しており、今後の編年研究を進める上で、基盤となる情報である。

以上要するに本論文は、各遺構の建築年代評価が難しい阮朝建築遺構群において、細部意匠とくに重梁の彫刻意匠から各遺構の建築年代評価を可能とする方法論をはじめて導いたものである。その方法には阮朝建築群の年代評価にかかわる建築史研究における汎用性も認められ、今後その研究を推進するための基盤となる成果として高く評価できる。

以上より、本研究はベトナム阮朝建築史研究の推進に寄与するところ大であり、それを通じて建築学の発展に貢献したことが認められる。よって本論文は博士（工学）早稲田大学の学位論文としてふさわしいと判断した。

2014 年 2 月

審査員	（主査）	早稲田大学教授	工学博士（早稲田大学）	中川武
		早稲田大学教授	博士（工学）早稲田大学	中谷礼仁
		ものづくり大学教授	工学博士（早稲田大学）	白井裕泰